

1

次のそれぞれの文の——線部の、漢字は読み方をひらがなで、カ  
タカナは漢字で書いて答えなさい。

- (1) 文明の源を探る。
- (2) 宮中に仕える。
- (3) 水筒にむぎ茶を入れる。
- (4) 図書室だよりの紙面を刷新する。
- (5) 体のふしぶしがイタい。
- (6) 丸々とコえたアヒル。
- (7) 事件のハイケイを調べる。
- (8) 思いがけない口ウホウが届く。

2

次のそれぞれの問いに答えなさい。

- (1) 次の①～⑥の組み合わせが、それぞれ類義語どうしの組み合わせになるように、に入る適切な漢字一字を書いて答えなさい。
- |   |    |  |                          |   |
|---|----|--|--------------------------|---|
| ① | 誘導 |  | <input type="checkbox"/> | 内 |
| ② | 進歩 |  | <input type="checkbox"/> | 上 |
| ③ | 命令 |  | <input type="checkbox"/> | 令 |
| ④ | 容易 |  | <input type="checkbox"/> | 単 |
| ⑤ | 安全 |  | <input type="checkbox"/> | 事 |
| ⑥ | 不在 |  | <input type="checkbox"/> | 守 |
- (2) 次の①～⑥の組み合わせが、それぞれ対義語どうしの組み合わせになるように、に入る適切な漢字一字を書いて答えなさい。
- |   |    |   |                          |   |
|---|----|---|--------------------------|---|
| ① | 出席 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 席 |
| ② | 生産 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 費 |
| ③ | 起点 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 点 |
| ④ | 革新 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 守 |
| ⑤ | 偶然 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 然 |
| ⑥ | 手段 | ↓ | <input type="checkbox"/> | 的 |

## 3

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《「私」は、小学生の頃から母が作る弁当をもって学校に通って  
いました。》

母は何があっても弁当を作り忘れることがなく、作らないということもない。毎日毎日毎日、作る。私は意を決して、母に頼んだ。

中学二年のころである。ねえおかあさん、<sup>①</sup>私\*<sup>こちが</sup>購買部のパンが食べたいの。だから明日、お弁当はいらないよ。

約束どおり、母は弁当を作らなかつた。私は購買部のパンを食べべた。おいしなかつた。本当においしなかつた。

私はそんなふうにして、母にまた弁当をあえて作らないことを頼み、\*ポテトチップスまで制覇した。パンもポテトチップスも、まったく夢のとき味であつた。

忙しい母を、弁当作りから解放し、私は夢のようなお昼を食べたと、当時は満足していたのだが、これまた大人になつてから、おそらく\*先ほどの弁当談義のうちに、母はなおのこと恨みがましい顔をして、こう続けたのである。「そんな思いで彩りゆたかに、デザートも忘れずに、一生懸命作つてくれるのに、あんたときたら、購買部のパンのほうがいいから弁当はいらないつて言つたのよ！」  
よほど恨みに思つているらしく、母にこれを言われたのは一度や二度ではない。

弁当を卒業したのは、外食のたのしみを覚えたからである。私の通つた小中高は、下校時間まで学校の外に出ることは禁止だったが、大学はもちろんそんなことはない。学食もあるし、学校のまわりには学生向けの安い定食屋がおびただしい数、ある。昼になると、同級生たちは連れだつてそういう店に行く。母の弁当を広げるのは、いかにも恥ずかしく、つまらなかつた。それで、もう作らなくていい

い宣言を、大学一年の終わりころにしたのであるが、きっとこれにも母は傷ついたに違いない。このことを購買部のパンのようにつこく言わなかつたのは、傷が深すぎて口にも出せなかつたからかもしれない。

でも、私たちはいつかは親離れしなくてはならないのだし、<sup>②</sup>いつかは母の弁当から卒業せねばならないのだ。

つい最近、私も自分の弁当を作るようになった。そもそもは、夕食の残りものが無駄になるのがいやで、弁当箱に詰めたのが始まりである。

最初は、自分で詰めた弁当など、中身も味もわかつていてつまらないと思つていたのだが、いざ弁当生活になつてみると、これが案外、おもしろいというか、しつくりくるのである。一〇年以上弁当生活だつたから、弁当慣れしているのかもしれない。

雑貨屋にたまたま入つたところ、けつこうな面積で弁当箱を取り扱つていてではないか。どうやら今、弁当はブームらしい。弁当箱のみならず、仕切りのカップも balan (仕切り) も楊枝も、いろいろな絵柄のものが出ていて、見るだけでたのしい。眺めていたら半端でなくわくわくしてきて、よし、まじめに弁当に取り組もう、と決意し、かわいかつたり凝つていたりする弁当箱のなかから、<sup>③</sup>もつとも堅実そうな、アルミ弁当箱を選んで、買った。二〇〇〇円とちよつと。

弁当をちゃんと作ろうとすると、「夕飯の残りもの」レベルではどうにもならなくなる、ということをはじめ知つた。弁当といえど、一食なのだ。そんなに手のこんだ弁当を作ろうとしなくても、やはり、昨日の残りものをアレンジしたり、週末に\*常備菜をまとめて作つたり、前の晩にメイン料理の下ごしらえをしたりと、なかなか頭と時間を使う。

何が入っているか知っていても、やっぱり弁当はおいしい。思いつきで作った料理が案外おいしかったりするとうれしいし、明日の弁当は何にしようと考えるのもたのしい。市販の弁当とはまったく異なる、ほっとするようなおいしさもある。

が、私はうすうす気づいてもいる。④ まだ、たのしいのである。

55

弁当生活一カ月の今、弁当はまだ「日常」ではなく「レジャー」、つまり気晴らしなのだ。えっと明日あれとあれの締め切りで、あつちはこのままで書いたから、その先のストーリーを今日じゅうに考えて……などと思考しているよりは、海苔とチーズを豚肉で巻いて照り焼きにしたのなんておいしいのではないかしら？ 母親がよく作っていた挽肉オムレツも作ってみようかな？ アルミカップでミニグラタンを……なんて、ほうつと考えていたほうが、たのしいに決まっているのである。

60

でもこれが、三カ月、半年、と続くと、だんだん弁当は重苦しくのしかかってくるに違いない。ああ、明日も作らねば……冷凍庫の食材を使い切らねば……たまには脂たつぶりのラーメンが食べたいけど……と、なつてくるにちがいないのだ。そのとき ※ 頭をかすめるのが、おそらく弁当箱の値段。

65

じつは私は、雑貨屋の弁当箱売り場で、<sup>\*</sup> 姑息にも計算したのである。六八〇〇円のこの弁当箱、すてきだし、長持ちしそうだけど、でも……（弁当作りがいやになったとききつと私を苦しめる）。五〇〇円前後のこの密閉容器、弁当箱にも使えるけど、でも……（たぶん一カ月で弁当作りを放棄し、この弁当箱はただの密閉容器に成り下がるであろう）。かつこ内はできるだけ意識しないようにしている、心の声である。

70

そうして選んだのが二〇〇円ちよつとの弁当箱。たかが弁当箱にしては、私の感覚では、ちよつと高い。でも、ちよつと高いくら

75

いのもでないと、弁当作りは持続しないのだし、かといって、「うわツ、高い」だと、泣きながら、目の下にくまを作りながら、世を理不尽に恨みながら、どす黒い気持ちになりながら、弁当を作り続けることになる。二〇〇〇円ちよつとというのは、弁当箱代として「よつしや、がんばれるところまで、がんばってみる」的な値段なのである。

しかしながら、<sup>⑤</sup> 毎日弁当を作っていて実感するのは、母の偉大さである。 今ほど冷凍食品が充実していなかったし、また古い人間の母はそうしたものを使わなかったから、朝っぱらから揚げたり煮たり、炒めたり巻いたり切ったり、なおかつ、配色、デザートうんたらと、考えているとすでに私は頭がおかしくなりそうである。

85

たしかにね、そりゃ、怒るだろうよ、と、今ならわかる。そんなふうにてんやわんやで「緑、緑が足りない」とか「りんご切らなきゃ、切ったら塩水」とかやっているというのに、「私ねエ購買部のパンが食べたいのーん」などと言われようものなら、ちゃぶ台ひっくり返して怒ります。ちゃぶ台がうちになかったから、一五年たつても恨みがまし、あなたはね、購買部のね、と言ひ募つたんだらう。

90

自分のぶんを作っているだけだから、私の弁当は道楽だ。いつでもやめられる。やめてもだれも困らない。でも、だれかのために作る弁当は、生活なのだ。それはまわし続けるしかなくて、たのしいとか、気晴らしとか、そんなことのずつと先にある。私たちの記憶に残る弁当は、きつとそういう弁当なのだ。茶色くても、デザートなしでも、食材以外の栄養を、食べる人に与えるような。

95

〈角田光代「道楽弁当」より〉

(注) 購買部のパンは「私」の通った小学・中学・高校では、弁

当を忘れた場合、購買部にパンを注文することができた。

100

80

ポテトチップス⇨購買部にパンを注文し損なつた人のみ、  
購買部でポテトチップスを購入することが  
できた。

先ほどの弁当談義⇨これより前、母は、弁当の彩りを豊か  
にしてフルーツもつけてほしいと「私」  
から要望されていたことに、不満をこぼ  
していた。

常備菜⇨作り置きして、いつでも食べられるようにしたお  
かず。

レジャー⇨余暇の遊びや娯楽。

姑息⇨その場しのぎ。

(1) ——— 線①「私購買部のパンが食べたいの。だから明日、お弁当  
はいらないよ。」とありますが、「私」からこのように言われたと  
きの母の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答え  
なさい。

ア 毎日、彩りが豊かでデザートつきの弁当を用意しなければな  
らない重圧から解放され、気分が軽くなる気持ち。

イ 人の気持ちを考えもしない「私」の心ない言葉にあきれると  
ともに、文句の一つも出ないほどにひどく落ち込む気持ち。

ウ 学校の購買部のパンを食べたいと言う「私」の発言に絶句し、  
もう二度と弁当は作らないと決意する気持ち。

エ 娘の喜ぶ弁当を作ろうとする自分の努力を台無しにする  
「私」の申し出を、どうしても許せない気持ち。

(2) ——— 線②「いつかは母の弁当から卒業せねばならない」とあり  
ますが、「私」が母の弁当を卒業したのはなぜですか。その理由  
を次の二つにまとめたとき、に入る最も適切なことばを、

本文中から十三字で書き抜いて答えなさい。

母の弁当を広げることが恥ずかしく、つまらなくなったから。

(3) ——— 線③「もつとも堅実そうだな、アルミ弁当箱を選んで、買った。  
二〇〇〇円とちよつと。」とありますが、「私」が「二〇〇〇  
円とちよつと」の弁当箱を買った理由として最も適切なものを次  
から選び、記号で答えなさい。

ア まじめに弁当作りに取り組むためには、もつとも質素であり  
ふれた弁当箱を選びたかったから。

イ 弁当生活はきつと半年も続かないので、値段の高い弁当箱を  
買うのはもつとしないから。

ウ いつか弁当作りをやめたとしても、弁当箱を使わなくなった  
ことがむだになつたと思わずに済むから。

エ 自分の感覚ではやや高い弁当箱を買うことで、毎日の弁当作  
りのできる範囲で続けられると思つたから。

(4) ——— 線④「まだ、たのしいのである」とありますが、「私」が  
弁当生活の楽しさを「まだ」と表現した理由として最も適切なも  
のを次から選び、記号で答えなさい。

ア 仕事の締め切りが迫っていないので、弁当のことを考える時  
間があるから。

イ 作りたいと思う弁当のメニューが、次々と頭の中に浮かんで  
くるから。

ウ 弁当生活をおつくうだと思ふときがいつか来ると、どこかで  
感じ取っているから。

エ 弁当を作るために買っておいた食材が、冷凍庫にたくさん残  
っているから。

(5)  ※ に入る最も適切なことばを次から選び、記号で答えなさい

## 4

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

- い。  
 ア からりと イ ちらりと  
 ウ さらりと エ ぐらりと
- (6) ———線⑤「毎日弁当を作っていて」とありますが、「私」はどのような理由から毎日弁当を作り始めたのですか。最も適切なことばを「だから」に続く形で、本文中から十七字で探し、その最初と最後の五字を書き抜いて答えなさい。

(7) 本文中の「私」の思いとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 母が大変な思いをして弁当を作っていたのだということが大  
 人になってから知り、母へ弁当の不满をぶつけたことに後悔の  
 念が残る。  
 イ 自分が家族のために弁当を作る立場になつてはじめて、毎日  
 の日課として人のために家事をすることの楽しさを強く実感し  
 ている。  
 ウ 誰かのために作る弁当は、暮らしを支え、食べる人に愛情を  
 与えるものであり、今は、弁当を作り続けてくれた母に感謝し  
 たい。  
 エ 母の作る弁当は自分の記憶にいつまでも残るものであり、最  
 近になって自分が弁当生活を始めたのは、母の影響によるもの  
 ではないかと思う。

《工業高校一年生で「ものづくり研究部」の心は、旋盤（金属  
 材料を機械で回転させながら、刃物を当てて切ったり削ったり  
 すること）の技術を上達させるために、部の先輩である原口に  
 付いて学ぶことになりました。》

準備を進める。実際に鉄を削るまでには、いくつもしなくてはな  
 らないことがある。機械のほり取り、測定機器のチェック、\*バ  
 イトの取り付け……。そして、\*心出し。工作物の中心と旋盤の中  
 心を合わせて固定し、三か所の\*ボルトを\*六角レンチで締めてい  
 く。均等に締め上げるためには、一気に一か所を締めてはいけな  
 い。三つのボルトを少しずつ締めていき、最後は強く締め固める。これ  
 にはかなりの力がある。初日の作業では、締め方が足りなかったら  
 しく、回転させたたん、がたんがたん、と妙な音がし始めて、あわ  
 てた。

「くっ」

心は歯を食いしばって力をこめた。どうにか工作物を取りつけて  
 原口を見ると、早くもハンドルの握りを回している。すでにバイト  
 の取りつけも終わっているらしい。不慣れなせいもあるけれど、歴  
 然とある力の差を感じてしまう。心はもう一度、レンチをボルトに  
 食い込ませた。

① やつとスイッチを入れる段階まで来た時には、すでに隣からは  
 高い切削音が響いていた。その確かな音をききながら、心も保護眼  
 鏡をつけた。作業服に安全靴に保護眼鏡。安全に留意した服装だが、  
 旋盤工は手袋の類はつけない。素手だ。バイトや\*キリコをじか  
 に触るのに危険を伴うが、それよりも手袋が機械に巻き込まれる  
 危険のほうが大きいからだ。それに手は工作物の仕上がりを確かめ

る大事な測定器でもある。感覚を鈍らせる手袋は不要なのだ。

心はスイッチを入れた。

シユーン

ゆっくりと右手のハンドルを回して、バイトを工作物に近づける。

キュルルーン、キュルルーン

②大丈夫。今日はしっかり固定されている。ひとまずほっとして、

キリコの具合を確かめていた時、

「そこ、削りすぎ！」

原口の声が飛んできた。心はびくんと手を止めた。

「測ってみろ。コンマーはちがうぞ」

そういわれて荒削りをかけたあとの工作物に測定器をあててみる。

デジタル表示は戸惑うように揺れたあと、すぐに決定値を出した。

59・83。

あ。

口の中だけで驚愕する。

「0・17もちがうやないかつちゃ。仕上げはせんつもりか？」

③「し、します」

答えると、原口は無造作に首を振った。

「できんやろ。その調子で仕上げ削りまでしたら、なくなっしてしまわないか」

「そんな大げさなと思うが、原口は真顔で、

「ちよつとそのダイヤルのメモリを合わせてみる」

と、バイトを工作物に近づけるためのダイヤルを指差した。ダイヤルにはハンドルがついていて、それを回してメモリを合わせる構造だ。回した分だけバイトは加工物に接近する。当然、分厚く削れる。

「は」

心は握りを握った。1メモリは0・05センチ。慎重に手に力をこめる。ちよつとでも油断すると回りすぎるのだ。神経を集中させて1メモリ分ずらしたところで手を止めた。

「雑すぎる」

最大限に細かく合わせたつもりだったのに、横から声が飛んだ。

「いいか。おれらが今目指してるもんは、文化祭でつくったような趣味の製品とはちがう。技術を競う精密部品なんちゃ」

原口は、個性と言っていた時とはまったくちがう顔で「よく見とけ」と言うようにあごをしゃくり、右手のこぶしをダイヤルのハンドルにあてた。そしてとんとんと軽くハンドルをたたいた。

心は目を見開く。ダイヤル上に生じたのは微妙なずれだった。ずれたかずれないか。ずれたとしても意味があるのか。けれどそこで原口はこぶしを止めた。

④「それだけ？」

「あたりまえやろ」

………

ダイヤルというのは、回して合わせるためのものかと思っていたら、そうではないようだ。⑤ごく微細な刺激を与えずにすものらしい。

「職人の仕事には、針の先でつくような細やかさで仕上げているかんといけん作業もある」

原口は言う。

完璧な数値を支えるのは、こんな細心の作業なのだ。逆にほんのわずかなずれが、工業製品の精度を大きくくるわせる。

わかっていたことだが、これほどとは。

空恐ろしいような気分になる。

原口は無言でスイッチを入れる。すぐにバイトの先からキリコが

75

70

65

60

55

50

生まれ始める。まさに針よりも細い。糸を引くような具合だ。

そこからさらに調節をして、仕上げ削り。一皮むけた鮮やかな銀色が生まれた。加工前の鉄とはまるで別もののような\*風合いだった。なんともつややかできめが細かい。無骨な鉄の塊かたまりだとは思えないくらいだ。加工の仕方ひとつでこんなに変わるなんて。

「触ってみろ」

⑤ 自ら明るく光を放っているような鉄に、心はそつと指を当ててみる。吸いついてきた。滑らかだ。いつも触っている加工前の丸棒とは明らかに手触りがちがう。

「手、気をつけるよ」

原口が言った。

「手は大事な\*やけん」

「はい」

心は仕上がった鉄の感触をしみ込ませるように、指を滑らせた。

〈まはら三桃「鉄のしびがはねる」より〉

(注) バイト＝旋盤加工における、材料を削り取る工具のこと。

心出し＝旋盤の回転軸と加工物の中心軸とを合わせる作業。

ボルト＝外側に溝みぞがついたネジ。

六角レンチ＝正六角形の穴をもつ、ボルトを締めたり緩め

たりする工具。

キリコ＝金属を加工するときに発生する削りくず。

風合い＝手触りや見た目の感じのこと。

(1) 線①「やつとスイッチを入れる段階まで来た時には、すでに隣からは高い切削音が響いていた」とありますが、この表現からわかる、原口に対して心が感じていることを説明した次の文の

□に入る最も適切なことばを、本文中から八字で書き抜い

て答えなさい。

〈まだ旋盤の初心者である自分と原口との間に□を感じている〉

(2) 線②「大丈夫。今日はしっかりと固定されている。」とありますが、工作物がしっかりと固定されていなかったときのことが書かれている最も適切な一文を本文中から探し、その最初の七字を書き抜いて答えなさい。

(3) 線③「し、します」とありますが、このように言ったときの心の様子として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 原口から大きな声で注意されたことにおびえ、鉄を削りすぎた自分の失敗をとっさにとりつくろう様子。

イ 原口から注意されたことで、仕上げ削りのことをすっかり忘れていた自分が恥ずかしくてたまらない様子。

ウ 原口から鉄を削りすぎてしまったことを注意され、他人の鉄の削り具合まで正確に見抜く指摘に驚く様子。

エ 原口から注意されたことが不思議で、自分が鉄を削りすぎてしまったことをまだ信じられない様子。

(4) 線④『それだけ?』『あたりまえやろ』『……………』とありますが、このときの心の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 精密部品を仕上げるための原口の作業を目の当たりにし、そのあまりの繊細さに対してあ然とする気持ち。

イ 原口の作業が自分の期待していたものと大きく異なっていたため、彼の技術指導に不満をもつ気持ち。

ウ 旋盤加工に必要とされる作業を覚えてくれた原口に感謝しつつも、ぶつさらばうな彼の態度に嫌気がさす気持ち。

工 原口の加工作業があまりにも細かく、初心者には理解できないものだったため、自分の技術のなさにいら立つ気持ち。

(5) ———線⑤「ごく微細な刺激を与えずらす」とありますが、原口は、具体的にどうすることで、ダイヤルに微細な刺激を与えたのですか。「〜こと。」という形で、二十五字以内（句読点も字数に数えます）で書いて答えなさい。

(6) ———線⑥「自ら明るく光を放っているような鉄に、心はそっと指を当ててみる」とありますが、このときの心の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 繊細に加工された鉄の仕上がりがあまりにも素晴らしいので、触ってよいのかどうか迷う気持ち。

イ 手触りや見た目が加工する前と大きく変わった鉄にひきつけられ、強く心を動かされる気持ち。

ウ 見た目が驚くほど変わった鉄に、自分が旋盤工として成長していく姿を重ねて、うっとりとする気持ち。

エ 加工によって、鉄の見た目をこれほど変えることができるのだと知り、旋盤の楽しさに有頂天になる気持ち。

(7) ※          に入る最も適切なことばを、本文中から三字で書き抜いて答えなさい。

(8) 本文中の心についての説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人との付き合いが苦手な面があり、人からの注意に過剰に反応してしまうことから、言動に自信のなさが見られる。

イ 要領よく人付き合いをしており、部の先輩から旋盤加工における注意を受けても、軽く受け流す術を身につけている。

ウ 器用に旋盤加工の作業をこなすことができず、先輩の姿に圧倒されながらも、旋盤加工に対して強い思いを抱いている。

工 旋盤加工における自分の感覚を信じており、周りの声に耳を貸さず、できるだけ自分の方法で作業を進めようとしている。

(これで問題は終わりです)